

自閉症者における社会的交流の本質について

川 瀬 泰 治

はじめに

前回の報告^①では、自閉症者の入所施設めぶき園において三〇歳前後になつた施設利用者の社会的相互交流の実態をとりあげた。多くの施設利用者が思春期・青年期の年齢段階ではいわゆる強度行動障害を保持していたが、一〇数年の施設での生活を経て、今日ほとんどそれがみられなくなっていることが注目された。自閉性障害の基本的症状は対人的交流の障害だとされているが、それに反して意外なほどに多くの利用者が社会的で多くの対人的交流を行っていることが分かつてきた。強度行動障害の特徴の多くが対人的交流の不調と関連すると考えられるので、めぶき園の利用者の対人的交流の実態を明らかにすることはたいへん有意義なことと思われた。そこでまず観察者である筆者が彼らの生活の場に参加して利用者と関わりながら彼らの対人的交流の仕方を体験してみることにしたのである。

観察の回数が増えるにつれ、最初は筆者を遠巻きにしていた彼らも徐々にこちらからの働きかけにいろいろなかたちで応じるようになり、また積極的に筆者に関わってくることも増えてきた。観察の当初、お互いに交流のないうちは確かに彼らに対して「自閉的」との印象が否めなかつたが、交流が進み彼らの気持ちや意図がある程度理解できるようになるにつれて、その印象が薄れてきた。まさに小澤^②のいうように、「自閉」というのは相対的な概念であることを実感するこ

とができた。さらに、そのうち利用者どうしや職員との間にもいろいろと豊かな交流があることが分かり、「自閉症者にしては意外にも社会的」との印象がもたれたのである。

その一方で、対人的交流があるとはいってもやはり普通のものとはかなり異なつた彼ら特有の交流の仕方があるのも確かである。交流はパターン化されたものが多く、一定のパターンに相手を取り込んで定型のなやりとりを繰り返すというものが多く、一歩進めてこちらが新しい交流をし向けるととたんに断固とした拒否の姿勢がみられる場合が多い。その特徴は「同一性の保持」や「常同行動」と言われる自閉症の特徴に関連したものである。そして、交流が進むにつれて、彼らが人との関わり自体を忌避しているのではなくむしろ逆に人に対して積極的な関心を示し、分かりにくいかたちではあるが自発的に交流を求めてくるという点においては「自閉的」という印象が薄れる一方で、その交流を通して見えてくる彼らの意図や欲求の中身においては彼らのもっている自閉症の特徴があらためて確実に顕在化してくるという印象がある。そこにはやはり他者との相互交流を阻む堅固な壁を感じざるをえない。しかしともかくこのような特有の交流パターンではあるが、彼らはそれによって他者と関わる経験を積み重ね交流の範囲を広げることによって一定の社会的発達を実現していることは確かかなうであり、またそれが施設での適応的な生活を可能にするのに大いに役立つといえるであろう。

問題はこの堅固な壁をいかに乗り越えて自閉症の本質に迫るかであり、彼らの対人的交流のあり方をその本質といかに関係づけて理解できるかである。最終的には自閉症の本質に基づいて自閉症者の世界そのものをひとつの全体として捉えることである。本研究では、われわれとは異なる文化に生きる人々として自閉症者を捉え、異文化理解という視点からその本質に接近しようとするが、本論文では次の一歩として、彼ら特有の社会的交流のあり方をどのように捉えるべきかについて、交流の場でみられる「常同行動」「同一性保持」という特徴についてどのような理論的な解釈が可能かを探求する。

認知心理学における自閉症研究の問題点

自閉症は一九四三年にカナ・L.⁽³⁾ によって「発見」されたとされる。それ以来六〇数年経て数多くの研究が積み重ねられ、その実態が明らかになるにつれて謎めいた自閉症者の特徴が人々の関心をひき、研究の分野だけでなく世間一般の興味も引き、テレビドラマや映画にもたびたび取り上げられ、広く世に知られるようになった。また研究の分野においては心理学の領域に限ってみても「心の理論障害説」、「感情認知障害説」、「中枢性統合障害説」、「実行機能障害説」、「ワーキングメモリー障害説」といった研究がさかんにおこなわれ、今日ますます関心が高まりつつある。

ところで、これらの心理学的研究は果たしてどこまで自閉性障害の本質に迫りえたのだろうか。たとえば、「心の理論障害説」や「感情認知障害説」がいうように、自閉症者は他者の心が認知できないとか相手の表情から感情を読み取ることができないとして、それらの事実によって自閉症者の生きている世界がどのようなかたちになるのか、またその特有の世界を我々がありありと体験できるものとなるのかとなるとおよそ心許ないのではないだろうか。これらの認知理論の多くは

それらの認知を可能にする生理的な構造があると考えており、そこになんらかの損傷を被ることが自閉症の症状の原因になると考えているようだが、脳の機能の障害の部位や部分的な機能不全が特定できたとしても、そこから自閉症者の特有の文化を全体として描く上ではあまり助けとはならないのではないだろうか。

これら最近の心理学分野での自閉症研究はM・ラター以来の「認知障害説」の流れにそったものであり、自閉症の問題を認知能力の障害と考え、自閉症の特徴を生じさせるのにどの認知の障害がもつとも有効かを突きとめようとする。このようなスタンスにはいくつ問題が指摘できるであろう。まず、人間の心の要素を知・情・意と区別できるとした場合、認知障害説は知の要素のみをとりあげて情・意の側面を軽視するという偏りがあるといえよう。人間の実際の生活を素朴に考えてみれば、知や理性は確かに重要な役割をもつが、社会生活や対人関係の営みを決定づけるのはむしろ感情、情動、意志、動機づけといった側面ではないだろうか。そして特定の社会において歴史的に作り上げられていく慣習的な諸機能の集合体（文化）として自閉症者の世界をとらえようとすれば、これら三つの要素がすべて複雑に絡まり合っていくプロセスを考える必要があるのだが、その点でこの知への偏向はその妨げになるものといえる。また人間存在を心と身体からなるものとした場合、認知心理学はこの両者を切り離したうえで心（認知能力）に偏向し、身体の働きを軽視しているといえる。人と人が社会的な交流を行う場合、むしろ身体レベルでのやりとりが基礎となるし、それがあつてはじめてあらゆる認知能力も可能になると考えられるが、その点で認知心理学は逆立ちをしている観が否めない。このあたりでいったん原点に立ち戻って、自閉症の本質を捉えるための有効な道を探る必要があるのではないだろうか。

カナリー・L.の研究

原点と言えば、最初に自閉症を報告したカナリーの研究であるが、彼は一九四三年の最初の論文「情動的交流の自閉的障害 Autistic disturbances of affective contact」⁽³⁾において「これまで報告されたことのない非常にユニークな症状を呈する一群の子どもたち」として一例の障害児を報告した。そのユニークな症状の中でも彼がもつとも注目したのは、母親が抱こうとしてもそれを予期して抱かれる姿勢をとることができないことであった。彼らは知的なレベルや言葉の能力においてはさまざまな違いがあったが、この点に関してはほとんどすべての症例で共通してみられたとしている。そして、この症状こそ障害の本質に関連すると見抜いたようである。そして論文の題名にもあるようにこれらの子どもたちの症状は「情動的交流」の障害によるものとしている。抱こうとする母親に比べて抱かれる姿勢をとるといのは、身体レベルでの交流そのものといえるが、カナリーは認知の能力よりもそちらを重要視したという点で最近の認知心理学よりもはるかに洞察力にすぐれていたといえよう。そのような交流は通常は生後二、三ヶ月ですでに可能となるのにこの子どもたちは生後二、三年たつてもまだできないことに驚きその点を強調している。ちなみに彼は、生後二、三ヶ月といえは母に抱かれる経験がそんなに頻繁ではないはずであり、したがってこの能力は学習されるものではなく生得的なものであるのではないかとして、症例の子どもたちは生まれつきその能力を欠いていると考えている。

発達心理学の分野における研究

心理学の分野で身体レベルの交流の重要性に着目してきたのは発達心理学者の浜田である。浜田は人と人が互いに身体を持つものどうし

として出会った場合の身体の両義性から出発する。出会いの場における人の身体というものは個別的であると同時に共同的概念であるというのである。個別性と共同性というのは矛盾する概念であるが、その矛盾を受け入れるところから出発しようというのである。

そもそも矛盾や両義性というのは西欧の論理学の流れをくむ心理学の分野では受け入れがたい概念であろう。伝統的論理学においてはAであるか非Aであるかについて同一律、矛盾律、排中律によって徹底的に区別することが論理の根本とされているのである。Aであると同時に非Aでもあるというような考え方はもつてのほかだということになるであろう。そして、心理学では一般的に身体の次元に関しては個別性を真理としており、個体としての存在を研究の対象としている。また人間どうしの交流に関しても、個体として交流を可能にする能力（対人認知の能力、対人的行動能力）をあらかじめ獲得したうえでその能力を発揮することで相互の交流が可能になると考える。これはまるでロボットのような人間像であるが、これまでのロボット研究においては論理的演算を電気回路によって実現した人工知能によって動くのがロボットであり、演算回路の集積度をあげて演算能力をあげればより有能なロボットができるかと考えるから、論理学の流れをくむ心理学の人間像がロボットに似てくるのは当然であろう。ところでこのようなタイプのロボットは「フレーム問題」に直面して八〇年代なかばで挫折したようである。

身体の個別性の側面は客観的であるし明晰判明なので論理学の要請に適合しやすいが、共同性の側面は主観的であり、ある意味では神秘的なものなのでさらに論理的思考と背反するところがある。浜田によれば身体の共同性には同型性と相補性という二つの契機が含まれている。同型性とは、出会った身体どうしが互いに同じような姿形をとるといふ現象である。たとえば崖から落ちそうになっている人を見たとき自分の身がすぐむという経験を考えてみよう。相手の身体に起こっ

ている筋肉の緊張の状態が瞬時にこちらにそっくりそのままのかたちで生じる現象である。これは誰でも知っている経験であるが、どのようにして実現されているかは分からない。音叉のついた箱を二つ向かい合わせると片方の音が自動的に他方の音を鳴らすという共鳴現象とそっくりである。人間の身体どうしは何か目に見えない波動のようなものでつながっていて、個別の身体を持ちながらも波動を通じて共鳴し合っているといった神秘的な解釈もできそうな現象である。この現象は生後数日からすでに新生児の共鳴動作 *cooing* (母親が舌を出して見せると赤ちゃんも同じように舌を出す) としてみられ、おとな同士が喜怒哀楽を共にする共感の現象など、身体どうしの出会いにおいて幅広くみられるものである。

また相補性については目と目が合う現象をその代表的な例として考えることができる。自分が誰かと出会ったとき、自分が相手を見ると同時に相手もこちらを見ていると感じるといつ誰でも知っている体験である。単なる物を見る場合と違って、相手の視線はまぶしくて目が合ったまままだいたたまれないような激しい感情を引き起こす特別な体験である。目が合うという体験はいつたい何なのか、物を見るのと相手の目をみるのとではどこが違うのかについて、個別性のみには依拠する心理学では答えることはできないのである。

相補性の契機は相互主体性という概念と対になっている。つまり、自分が相手の目を見る場合には、自分は見る主体であり相手は見られる客体である。この面だけ考えれば物を見るのと相手の目を見るのとでは違くない。しかし、逆に相手が自分を見ているという場合は、相手が見る主体であり自分は客体になるということである。ところで、主体性とは自分が何かをするときそれをしてるのは確かに自分であるという自覚のことである。本来主体性というものは自分で自分の主体性を感じることができるのみであり、個別の身体をもつことよって切り離された他者の主体性は感知できないはずである。しかし、目と目が合

う現象においては、相手の視線に主体性を感じるといふこの本来不可能なはずのことができていると考えなければ理解できないものである。そのうえで自分と相手がともに主体性をもつ存在としてあり、互いに主体として能動的に働きかけたり受動として相手の働きかけを受けとめたりすることをやりとりするというのが相補性である。

相補性は目と目が合う現象以外にも握手やハグなど、人と人が身体を直接触れ合いながら関わり合う場合はもちろん、人と人の交流のあらゆる範囲にわたってみられるものである。カナーが注目した、母親と子どもの間で交わされる「抱く―抱かれる」のやりとりはまさにこの相補性の契機のことである。浜田は自閉性障害の本質はこの身体の共同性のうち、この相補性の契機に関連するとみており、カナーの見方と一致している。

身体の共同性の両契機は、これまでみてきたように認知機能や言語機能の出現に先だつて発達のかなり早い時期から機能し出す。共鳴動作は生後数日にすでにみられるし、母親が自分の子どもと目が合ったしたと感じるのは生後二、三ヶ月である。カナーによれば母親が抱こうとするのに応えて抱かれる姿勢をとるようになるのも同じ時期だといふ。これらを合わせ考えると、生後二、三ヶ月には同型性と相補性の両契機はすでに機能しだすと考えて間違いないであろう。そして、向かい合う母と子が目と目を合わせながら主体性を交わし合う二項関係が成り立つ。はじめは子どもの側の反応は単なる反射的な性質のものかもしれないが、母親の側では赤ちゃんの主体性を感じしそれに応じた反応を返すというやりとりをしているうちに確実に相互主体的な二項関係が成立していくものと思われる。そのような確実な二項関係を前提として三項関係が成立してくる。三項関係とは相手の視線が自分からそれてよそに行ったことが分かり、相手の視線の行く先にある物を自分も見るといふかたちで、母と子が一緒に同じものをみる関係である。認知心理学でいう「共同注意」はよく似た概念であるが、そ

ここでは二人の人間が「注意」というある種の認知能力をもち、互いにその方向を正しく認知しあいながら調整するという認知レベルの機能をいうが、ここでいう三項関係は身体レベルでの共同性の働きというまったく別次元のものである。母と子が一緒にある物を見ながらそれに関わり、身体レベルでの同型と相補を通じて相手に共鳴したり相手との違いを感知して同調したりしながら互いに同じ身体となりあう共同の存在になるというのが三項関係である。

この三項関係は、浜田⁽⁵⁾が「意味世界のオルガナイザー」というように、世界のあらゆる意味を発生させるものである。たとえば、ウンチはじめは赤ちゃんにとってそのへんのおもちやなどと変わらない単なるものであり、平気で触ったりもする。しかし、母親がウンチに対してとる態度、顔をちよつとこわばらせたり人差し指と親指でつまんだり声のトーンが落ちたりといった、身体に表れる状態を見るだけで赤ちゃんはウンチに対して母親と同じ身体の状態になり、それがウンチの意味となっていく。これが身体レベルでの意味の発生である。世界のすべての意味はこのように三項関係を通じて母親が体現する意味を写し取るようにして子どもの側に発生してくるのである。そして母と子が同じ意味を共有することで、同じ世界に住むことができるようになっていくのである。

自閉症児は発達のごく初期において身体レベルでの共同性が成り立ちにくい障害だとすると、それを元にした三項関係が成立しにくいということになる。そして自閉症では意味の発生が困難だということになる。意味のない世界とはいったいどのようなものか。

浜田⁽⁴⁾は三項関係の成立困難から派生してくる自閉症の症状として、多動・寡動、常同的固執、同一性保持の三つをあげている。自閉症児の幼少期は多動が目立つ場合が多い。目が覚めている間はとにかく動かせかかると動き回り、動くことに何の目的もないような印象がある。はたから見ていると動きに意味が見いだせないが、自閉症児自身にとって

もまわりのものに意味が見いだせず無意味の世界が広がっているのではないかという。あるものに対して意味が見いだされれば注意をそれに向けて対象としてなんらかの関わりをもつことができる(人ともとの二項関係)。意味のない世界で次々と注意が移ることになれば多動となり、何にも注意を向けなければ寡動になるのではないかという。自閉症児が少し成長すると多動は目立たなくなるが、代わりに「常同行動」や「同一性保持」が目立つようになる。浜田は無意味な世界の中に自閉症児なりの意味を見いだそうとする試みが「常同行動」や「同一性保持」だという。「常同行動」は、働きかければ決まった反応が返ってくる物理的な対象に対して繰り返し働きかけて安定した意味を見いだそうとする比較的発達のレベルの低い自閉症にみられる意味作用であるとし、「同一性保持」は人との関わりの中かで意味をもった行動パターンに固執して繰り返し意味を見いだそうとするより高度な段階の意味作用だとしている。めぶき園でみられた利用者の典型的な対人的交流の反復は「同一性保持」の段階に属すると考えられる。

浜田によれば無意味の世界は人間にとって耐え難く、自閉症児にとっても大海のまっただ中にひとり彷徨うようなものである。そして無意味の海から逃れるべくなんとか意味の島を見つけ出してすがりつこうとする姿として自閉症の症状をみるのはある程度納得のいくものである。しかし、無意味な世界とはいったいどのような世界なのか、またそれがなぜ居心地がわるいものなのか、さらに同じことをくり返すとか同じパターンに固執することがなぜ意味をもつのか、なぜ安心をもたらずのかという疑問も生じる。自閉症者の世界をさらに深く理解するために、これらのことをもう一步突っ込んで明らかにすることが必要なのではないだろうか。

統合失調症についての研究

ここでふたたびカナーに戻ってみよう。カナー⁽³⁾は当初から自閉症と統合失調症の類似性に言及していた。「自閉性」ということばはもとも統合失調症の中核的症状とされていたものであり、人生早期に統合失調症類似の症状が見られる珍しい症例として「早期小児自閉症」と名付けたほどである。カナーが一例の自閉症児の特徴としてあげたものは、(a) 極端な自閉的孤立、(b) 言語発達に大きな遅れや歪みがあること、(c) 同一性保持についての強迫的要求、(d) 特定のものと対する並外れた巧緻性である。(d) 以外は統合失調症と共通しており、なかでも(a)は統合失調症と自閉症の両者において中核的症状である。統合失調症と自閉症はまったく違う疾患かそれとも自閉症は統合失調症の早期発症型かをめぐってカナーも含めて論争があったようであるが、いずれにしても症状の類似性からして両者の体験する世界にはなんらかの共通性があると見た方が自然ではないだろうか。そして自閉症の世界を理解するひとつの手段として、統合失調症の体験する世界が有効な手がかりとなるのではないだろうか。

統合失調症といえばシュナイダー以来、幻覚・妄想が一級症状とされており、統合失調症の精神現象の本態だと考えられているが、滝川⁽⁶⁾はそれらはむしろ二次的なものであるという。困難な状況に耐えきれず、それなりの対処をして状況に適應し一定の安定を得た状態だといっているのである。統合失調症の本態とはその前の困難な状況のことであり、そちらが一次的なのだという。それではその困難な状況とはどのようなものなのか。滝川は統合失調症の急性期において生じる心的現象について次のように書いている。

「頭は静かに冴えわたっているのではなく、なにかがひしめきあっているような騒がしさにみだされてきます。これは森の梢が風に騒ぐような音のざわめきというよりも、観念のざわめきに近いものでしょ

う。断片的な観念や観念以前のなにかが頭の中にひしめきあい、いつぼう、外界はちりぢりに断片化し、無数のきれぎれの意味や暗示(ほのめかし)がめまぐるしく散乱かつ殺到する世界になってゆきます。総合的・全体的なものごとをとらえて動くのはまったく不可能になり、断片的な意味や微かな暗示にふりまわされて動くようになりますから、傍目には支離滅裂なふるまいが目立ちはじめます。やがて頭のなかもまわりの世界も意味なき意味の乱舞のような状態におちいり、錯乱状態とみえるようになります。」

急性期の統合失調症患者を傍目から見たときの姿は記述の終わりの方にあるが、自閉症児の多動の状態を彷彿とさせるものである。滝川によればこの急性期の状態は人間に固有の認識のほたらきが解体して世界の意味が失われていく状態ではないかとしている。

人間の生きている世界は、外界を感覚・知覚そのままに直接体験するのではなく、意味(概念)によって捉えなおした世界である。この意味を媒介にして認識された世界は人間に固有のものであり、乳幼児期から他者と経験を共にすることによって人間どうしに共有された世界となり、長い発達の過程を通じて空気のように自明で確実なものとなっていく。滝川によれば統合失調症の急性期はこのような自明で確実な世界が揺らぎ、共有された意味世界が失われ、外界が感覚・知覚のままに現れてくる世界ということになるであろう。自閉症児の場合には初めから共有された意味世界は成立していないと考えられるので、いったん成立していた意味世界が崩壊していく場合と多少の違いはあるがかなり共通の体験世界となることが推測される。統合失調症の急性期は恐怖と危機に満ちた世界であろうとされている。またウイング⁽⁷⁾によれば、自閉症児では統合失調症ほどではないにしろなんでもなものを怖がる傾向がかなりの範囲でみられる。

統合失調症の体験世界と関連が深いものとしてA・ハクスレー⁽⁸⁾によるメスカリンの影響下で現れる精神現象の報告が興味深い。メスカリ

ンを飲んで三〇分ほどたったときの変化について次のように記している。

「私は自分の視界のなかで、金色の光がゆつくりとしたダンスを踊っているのに気づき始めた。そして少し経つと、異様に美しい赤い表面のようなものが幾つか現れ、それはピカピカ光るエネルギーの中心点を持っていて、その中心点から次第に外へ膨れあがりながら広がっていった。この中心点は、それ自体が絶えず自分の形を変えていく生命を持ったパターンであって、ぶるぶると震えていた。」

ここにはものが意味を失い視界のなかをあちらこちらと流動したり変化したりする様子が記されている。そして一時間半後に現れる世界の変化は、「アダムが自分の創造のその朝に見たもの」、つまり「裸の實在が一瞬一瞬に目の前に開示していく奇蹟である」と表現されている。たとえば花は人々と共有できる意味を失い、存在そのものとして現れる。さらに花としての概念的認識が失われると同時に花でないものと融合し、自分の感覚・知覚と融合していく様子が次のように記述されている。

「私は花々を見つめ続けた。そして花々の生命を持った光の中に、呼吸と同じ性質の物が存在しているのを見たように思う―だがその呼吸は、満ち干を繰り返して、もとのところにもどることのある呼吸ではなかった。その呼吸は、美からより高められた美へ、意味深さからより深い意味深さへと向かってだけ間断なく流れ続けていた。」

ハクスレーはこのような体験世界に魅せられていつまでもそこに留まりたいと望む一方で、突然恐怖感に襲われたという。

「私は自分がいま大きなパニックの断崖のふちに立たされている、と突如実感した。私はあまりにも遠くへ行きすぎてしまう……。それがたとえより高められた美の中へ、より深められた意味深さの中へ向かってのものだったにせよ、私はあまりに遠くへ行きすぎ続けている……。私は突然恐怖の中で感じたのだった。この時の恐怖の意味をあらわす。」

とから分析してみて、私はその理由をつねにシンボルで作られたケチ臭い世界にだけ生きている魂が、あまりの大きさのために耐えきれない実在の脅迫の圧力によって圧倒され、バラバラに崩壊させられるのを恐れる時の恐怖なのだということを理解できた。」

以上のように、統合失調症やメスカリン投与下での体験世界を並べてみると、意味が失われた世界においては共通してすべてが常に動いて流れているという特徴がみてとれる。クラウス・コンラート⁹⁾は滝川と同様に統合失調症の急性期に相当するアポカリプス期の体験を統合失調症の本態と捉えているが、そこにおいて「すべてはごく短時間心に浮かぶだけで新しいものに席を譲る。イメージとゲシュタルトとの、巨大で、果てしなく続き、把握することのできない流れである。」というように、やはり流れが特徴的である。そして流れや動きは圧倒的で際限がなく、そのこと自体が恐怖そのものであることがうかがわれる。

自ら自閉症者であるドナ・ウィリアムズ¹⁰⁾は自伝の中で幼少期の体験について次のように記述している。

「わたしには、家の中は色彩の洪水のように見え、物も人もすごいスピードで流れるように動いており、はつきりと輪郭をつかむことができないほどだった。」「わたしの目に映るものは、皆飛んでいた。色も、物も、人も、飛んでいた。ドアはばたんばたん蹴られては消え、時には人々の顔も、同じように消えてゆく。人の姿はいつも一部分だけで浮遊していて、頭のとっぺんからつまさきまで「全部のそろった人間」は、どこにもいない。」

自閉症者の世界においても同様な流れが認められる。ではこれらに共通である意味のない世界はなぜ流れるのであろうか。

生成の概念について

ベルクソンは本能と知能を対立するものと捉え、本能を流動的なものとし、知能を固定的なものとした。意識に与えられるがままの世界は本能的なものであり、刻々と流動してやまないという本質をもつ。その流れを「持続」とか「生命の躍動 エラン・ヴィタル」とよんだ。「持続」とは人間的な生き生きとした時間でありカイロスとしての時間である。これに対して空間化され固定された時間はクロノスとしての時間である。カイロスとしての時間は生の基盤を形成するものであり、生命の本質としての生成 (Werden, devenir, becoming) である。生成はすべてのものが変遷流動してやまない流れであり、原理的に把握不可能である。それを認識しようとすれば生成を固定することになり、生成は存在へと変化する。この生成の概念に従えば、意味のない世界は生成そのものだということになる。

ミンコフスキーによれば、生成そのものは恐ろしいものである。「生成のたてる波浪は強力であるが灰色で混沌としておりすべてを巻き込んで押し流す」ものだという。そこで生成にひとつの方向を与えてそこから分離しようとするのが人格的躍動であり、それによって自我が成立したり私の作品を通して自我の実現が可能となる。しかし人格的躍動は生成を制限して成り立つものでありそこには喪失の感情が伴う。つまり、「作品に打ち込んでいくときに、その躍動と同じぐらい価値をもつものが周りで経過しているという感覚をもたらず」というのである。そして「人生における貴重なものを断念したのではないか」という疑念が生じる。このような感情は耐え難いので、それを覆い隠す作用が必要となる。それが「抑圧」や「忘却」であるが、縁暈のように取り囲むそのような疑念の元になっている生成に脅かされ続けるという。

一方で自分自身を断念して生成と融合することは「現実との生命的

接触」とされ、制限という重荷から解放されてそれ自体は安らぎを与えるものである。しかし、それだけでは生成の混沌のなかに落ちて翻弄されてしまうことになる。問題は、人格的躍動を維持したまま生命的接触を維持できるかどうかであり、生命的接触を人格的躍動に従属させることが理想である。生命的接触は人格的躍動に対立しつつ従属し、「私は生成によって運ばれるが、同時に生成を私のうちに吸収する」というあり方がのぞまれる。ミンコフスキーによれば、統合失調症者は生成に従属させることができなくて人格的躍動が固定化されてしまい、流動するもの、変化するもの、発展するもの、非合理的なもの、といった生の豊穡さといえるものがすべて心理的生活から失われた状態だということ。

ミンコフスキーの概念装置に自閉症者の世界をあてはめてみるとどうなるだろうか。統合失調症の場合は、いったんは人格的躍動によって生成から離脱することが可能であったが、自閉症の場合には発達初期の障害により離脱そのものがたいへん困難だと考えられる。したがって人生初期から生成の波浪に翻弄されて漂うことになるであろう。統合失調症のように一度固定し安定した世界を体験したうえでそれを失う場合と初めから生成の流れの中に居続ける自閉症者では、自身の内的体験と外部から観察される状態においてかなり様相が異なるのではないだろうか。たとえば、コンラート・クラウスは統合失調症の急性期の行動記録を次のようにしている。

「ただちに国防軍精神病院へ送られたが、門の前で立ちつくし、前へ動こうとしなかった。中へ入ろうとしなかったのである。もつれっぱなしのことを喋り、閉鎖病棟へは力づくで運ばねばならなかった。病棟で彼は暴れ始めた。ドアに身体をぶつけ、わけのわからぬことを大声で吠え叫び、看護士につかみかかり、自分の手に噛みつき、呂律の回らない大声を出し、抑えつけるのが大骨折りであった。スコポラミンを注射してやっとベッドに縛りつけることができた。しかし、す

ぐ目を覚まして、また暴れ出した。……」

たいへんな恐慌状態であり、青年期の自閉症者でみられる強度行動障害の様子を彷彿とさせるが、意味世界との関連でいえば幼少期における自閉症児の多動の状態と比較するべきであろう。統合失調症では急性期の段階に突入するとあまりに緊張病状態が激しくて、過ぎ去った後でもその時の体験を本人から聞き出すことは不可能なほどだという。それに対して自閉症児の多動は比較のおだやかである。時々多動の最中に泣き出したり怒りの爆発はあるが、概して淡々と動き続けるといったものである。

ミンコフスキーが言うように、生成にはすべてを飲み込んでしまう濁流のような面とそこに融合すれば安らかな平安をもたらす面という二面性がある。またハクスレーが言うように、生成には魂がばらばらに崩壊させられるような恐怖という面と美や意味深さをもたらすという面の二面性がある。統合失調症の患者やメスカリン体験者のような人格的躍動によっていったんは自我を成立させた人にとっては前者の濁流に呑み込まれる恐怖が強調され、自閉症児では後者の美や平安の面が強調されるのではないだろうか。

ベルクソンは生成に意識が直接に達するような持続を純粹持続だとし、物質化された時間と区別している。そして純粹持続は動物もおそらく知覚しているだろうという。動物の場合はおそらく純粹持続がそのまま環境への適応と直結する仕組みが備わっているのである。しかし、人間はある時期から生成を固定し封じ込めた土台の上に人工的な環境を作り上げてそこに住もうという強い傾向が類としてそなわっているのではないだろうか。自閉症の「こころ」のありかたも人間の精神現象のうちにはらまれていた可能態として連続的にとらえる立場からすると、当然この傾向は原初的なかたちで自閉症児のなかにあるはずである。この観点からすると、生成を固定化し物質化するうえで最強最大の道具は言葉であるが、もともと原初的なものがいわゆる

「常同行動」であり、「同一性の保持」なのではないだろうか。ドナ・ウィリアムズは自伝の中で次のように書いている。

「たいていの物事は、わたしには変化が早すぎて、ついていけなかった。だからこそわたしは、同じことを何度も何度も繰り返すのが好きだった。いつもどおりのことをしていれば、わたしは楽しかったし、気持ちもやすらいだのである。」

ベルクソンによれば純粹持続(時間)としての生成を固定し物質化したものが空間である。空間は諸感覚の共存の結果生まれる。しかし空間の観念の元になるのは諸感覚であるが、感覚自体は拡がりを持たない単なる質である。したがって感覚に精神によるなんらかの能動的介入が必要となる。諸感覚の共存を生み出す精神の独自の作用とは「空虚な等質的環境の直観」だという。変遷流転の流れの中にあつてはすべてのものは異なり次々と移り変わっていく。そのなかでさっきの感覚と今の感覚を並べて比較しようとするが、そのためにはさっきの感覚が流れてしまわないようにそれを繫留する必要がある。それらの感覚を繫留する場所が空間であるが、逆に繫留された諸感覚が比較された結果それらが等質であつてはじめて空間も可能となる。自閉症者の「常同行動」は、同じことを繰り返すし、それが同じであることを確認することで生成の流れのなかに固定し安定した空間を作り出すと試みていると考えられる。ただしベルクソンのようにその等質的環境を「空虚」なものとするべきかどうか、ミンコフスキーはその点に対して反論している。ベルクソンは生命と存在、時間と空間をあまりにも対立的に捉えている。意識の直接所与に照らしてみた場合、「生きられる空間」というものがあるのではないかというのである。そして「生きられる空間」のなかでの「生きられる継起」を強調している。ドナ・ウィリアムズが同じことを繰り返すことに楽しさを感じるというのは、それが「生きられる継起」だったからではないだろうか。

おわりに

統合失調症の体験世界を生命の本質としての生成という観点から理解しようとするミンコフスキーに依拠しながら、自閉症者の体験世界に接近を試みた。彼らの示す「常同行動」「同一性の保持」という特徴に対して、彼らの世界のあり方との関連においてかなり本質的な理解が得られたのではないだろうか。定型発達者は人生の初期においては生成の流れの中に没していても、言葉や観念世界の出現とともに生成から離脱し、安定した世界に生きるようになるが、自閉症者は生成からの離脱が困難であり、距離をとろうとせずかな手掛かりにしがみついているように思える。また一方では生成に翻弄されながらも同時にある種の蠱惑的な魅力にとりつかれてしまうのではないだろうか。ところで、そのような特徴を維持したままで他者との相互交流に向けての歩みは可能なのであるか。

カナー³⁾は統合失調症と自閉症の類似点について指摘したあと、両者の違いについて、「精神分裂病的な人が、彼がその一部分であり、また接触してきた世界から踏み出すことによって自分の問題を解決しようとするのに対して、われわれの子どもたちは、初めから完全な局外者であった世界に、用心深く触手をのばしながら、しだいに歩みよってゆくのである。」と述べた。自閉症者は「常同行動」「同一性保持」といった孤立的な傾向を強く持ちながらも、カナーのいうように、徐々にではあるが共同性の世界へと歩み寄ろうという傾向を持っているのは確かなようである。この一見矛盾する二つの傾向は果たして統合が可能なのだろうか。

高岡⁴⁾は、この点に関して吉本隆明の理論に依拠しながら「個人と逆立しない共同性はあるか？」あるいは「あるがままの個人を全面的に残したまま、一対の人間関係は成立するか」という観点から考察している。定型発達の場合には、個人と共同性は逆立するのが普通で

ある。二つの人格は共同性においては個々の人間とは異なる水準への変化が生じることによって一つの人格に結合するという。しかし自閉症スペクトラムを有するドナ・ウイリアムスは、同じ障害をもつブラインとの間に一対の関係を築き、しかも互いに内面生活を失うことがなかったことに着目している。そこには、それまでの「あるがまま」の個人を全面的に残したまま、一対の人間関係へ至ろうとする姿が見られるとし、定型発達者とは異なったかたちでの「私の世界」から「私たちの世界」への飛躍が出現するのではないかとしている。そして自閉症者は定型発達者との間ではなく自閉症者との間でこそそのような関係を互いにもつことが可能だとしている。

前回の報告でもみたように、確かに自閉症者どうしの間にはさまざまなかたちで一対の人間関係というべきものがみられる。生成の最たるものである他者が、自閉症者にとってどのようなものとして現れるのか、また自閉症者どうしで到達する「私たちの世界」とはどのようなものか、などが今後の検討課題として残る。

引用文献

- (1) 川瀬泰治 二〇〇七 自閉症者の青年期以降における社会性の発達 別府大学紀要、第四八号、二七―四〇
- (2) 小澤勲 一九八四 自閉症とはなにか 精神医療委員会
- (3) カナー・L・十亀史郎他(訳) 二〇〇一 「幼児自閉症の研究」 黎明書房
- (4) 浜田寿美男(編著) 一九九二 『私』というものなりたち ミネルヴァ書房
- (5) 浜田寿美男 一九九九 『私』とは何か…ことばと身体の出会い』 講談社選書メチエ
- (6) 滝川一廣 二〇〇四 『「こころ」の本質とは何か』 ちくま新書

- (7) ローナ・ウイング、中園康夫他(訳) 一九八〇 「自閉症児…親のためのガイドブック」 川島書店
- (8) ハクスレー・A・、今村光一(訳) 一九八四 「知覚の扉」 河出書房
- (9) クラウス・コンラート、中井久夫他(訳) 一九九四 「分裂病のはじまり」 岩崎学術出版
- (10) ドナ・ウィリアムズ、河野万里子(訳) 一九九三 「自閉症だったわたしへ」 新潮社
- (11) ベルクソン、中村文郎(訳) 二〇〇一 「時間と自由」 岩波書店
- (12) ミンコフスキー、中江育生他(訳) 一九七二 「生きられる時間」 1、2 みすず書房
- (13) 高岡健 二〇〇七 自閉症論の原点…定型発達者との分断線を超える 雲母書房